

19世紀アメリカにおける『ウイルソン・リーダー』の 革新的要素と位置づけ

—『マクガフィー・リーダー』との比較を中心に—

西本喜久子

(2007年10月4日受理)

A Study on the Progressive Factors of the Willson's Readers and the Historical Status
in 19th Century America

— Focusing on the comparative study between the Willson's First Reader and
the McGuffey's First Reader —

Kikuko Nishimoto

Abstract. The purpose of this paper is to clarify the historical progressive factors and the status of the Willson's Readers in 19th century America. It is based on the comparative consideration concerning the construction and content of the lesson materials of the famous McGuffey's First Reader published in 19th century America. In 19th century America, gradually the Pestalozzian theory had been prevailing especially for elementary school education due to the stoic way of teaching reading or recitation. The author believed this new pesralozzian education was the new educational style and new framework of education for Japan at the beginning of Meiji Era. Undoubtedly, the Willson's readers had been based on this principle. The author thinks this is the reason because the readers were selected as models of *SHOUGAKUTOKUHON* compiled by Yoshikado Tanaka and published by Monbusho in 1873-74. The results of this research are as follows; (1) The character of the material is based on the developmental stage of language (letters) acquisition of schoolchild which is admitted one by one. (2) The lesson sentences are interrogative and thinking and answers are based on observation of illustrations. (3) The genre and range of materials are more the reflected extensions of the child's life experiece.

Key words: 19c, America, progressive, Willson's Readers, McGuffey's Readers

キーワード: 19世紀, アメリカ, 革新的, ウイルソン・リーダー, マクガフィー・リーダー

はじめに

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：吉田裕久（主任指導教員）、山元隆春、
難波博孝

田中義廉編輯・那珂通高校正『小學讀本』¹⁾は近代学校教育開始期に明治10年代まで全国各地で翻刻され、ところによっては明治20年代まで用いられた教科書である。同読本は、1860-61年版『ウイルソン・リーダー』(Willson's Readers)を「翻訳」したものと云われ、両読本の関連については、教材の一部を取り

上げて類似性を示されることが多い。このような中で、望月久貴は近代国語教育史研究において『小學讀本』の成り立ちを『ウイルソン・リーダー』との比較考察に基づいて論及し、最終的に著書『明治初期国語教育の研究』(2007)²⁾としてまとめた。が、同書では、執筆者ウイルソン (Willson, Marcius 1813-1905) の経歴、『ウイルソン・リーダー』の全構成と全教材、アメリカにおける位置づけや史的意義について検討されていない。

さらに、明治初期にわが国は新しい教科書のモデルを『ウイルソン・リーダー』としたが、その選定基準と決定に至る経緯は全てが解明されているわけではない。しかしながら、『ウイルソン・リーダー』の特徴と19世紀のアメリカにおける位置づけを明らかにすることは、明治初期にわが国が構築を試みようとした国語教育像を描くことにつながるのではないかと考える。『ウイルソン・リーダー』の紹介文に示された progressive を用いて、『ウイルソン・リーダー』の特徴を本稿では革新的要素と表した。

1. 研究の目的と方法

本稿の目的は、明治初期わが国が志向した新しい教育の方向性を検証するための手はじめとして、『ウイルソン・リーダー』第1読本(1860)³⁾に示された革新的要素を明らかにしてその歴史的意義と位置づけを考えることである。

そのために、1836年に初版刊行以来改訂を重ね、20世紀初頭までアメリカで最も普及した『マクガフィー・リーダー』(McGuffey's Readers)⁴⁾から初版本、William H. McGuffey 著『マクガフィー・リーダー』第1読本(1836)⁵⁾との比較により、『ウイルソン・リーダー』の革新的要素の抽出に努める。さらに、その革新性の理論的根拠をウイルソン著『実物教授 指導の手引書』(1873)⁶⁾に示された実物教授 (Object Teaching) の基本的指導観に求め、それがどのように『ウイルソン・リーダー』に現れているかを考えた。

2. ウイルソンについて

これまで先行研究において、『ウイルソン・リーダー』の執筆者ウイルソンについては僅かに「言語・歴史等の教授法の大家」と記されるのみで「殆ど知りようがない」とされてきた⁷⁾。ここで、筆者の調査に基づき、ウイルソンの経歴における『ウイルソン・リーダー』との関わりについて見ておこう。

(1) 少年時代の家庭環境

HISTORY OF ONTARIO CO., (1876)⁸⁾によれば、ウイルソンは19世紀後半湖畔の保養地として有名になるカナダに近い Ontario County の Richmond で少年時代をすごした。父 Gilbert はバプテスト教会に属する信仰心篤いキリスト者として90歳を越えてなお、地域住民の尊敬を集めたと記されている。父は大家族の3男としてマサチューセッツ州 Richmond で誕生。1789年に West Stockbridge に移住後兄弟と共に農業を手伝いつつコモン・スクール教育を受けた。同州生まれの Electra Hendricks と1810年に結婚し2女1男に恵まれるが、1816年に Electra と死別。その後1821年に一家は移住を開始、ニューヨーク州 Ontario County の Richmond に居を定める。この地は現在は Honeoye と称される。Honeoye Lake の北側に位置し Allen's Hill の農業に適した豊かな土地であったという。父 Gilbert は Allen's Hill で95エーカーの農地を譲り受け、馬ぞりに荷馬車1台分の荷物を積んだ旅の到着を迎える。その後 Selecta Spencer と再婚。ここで、子どもたちに十分な教育環境を整えたとされる。

『ウイルソン・リーダー』第1読本に登場する農業生活、家畜との日常生活、馬ぞりなどは全て少年時代の実生活に題材があることがわかる。また、神への祈りや宗教的題材については、時代の持つ教会の影響と共に質素で敬虔なキリスト者として生きた父親の影響も見すごすことはできないであろう。

(2) 『ウイルソン・リーダー』執筆の経緯

Peter J. L. Fisher と Sheila Shapiro 共同執筆の *History of Reading News*. (1996)⁹⁾によればウイルソンは1831年から2年間、Ontario County の名門、Canandaigua Academy で学び1836年に Union College を卒業する。Highland Gymnasium で古典と数学を教え、その後4年間 Poughkeepsie Collegiate Institution で教職に就く傍ら、1840年に弁護士に認定される。が、喘息のため法廷活動が困難となり、1849年から53年までの4年間はかつて学んだキャナンダイグア・アカデミーに校長として奉職した。1853年にハーパー社 (Harper & Brothers) と学校教科書執筆契約を結んだウイルソンは Vassar's Woman's College 創設の際の学長就任要請を断り、それ以降は執筆活動に専念する。1857年から1年間はニューヨーク市で出版社を経営し *School Mate* という新聞を発行したこともある。こうして、1860年から61年にかけて『ウイルソン・リーダー』の最初の4冊が刊行、続く1862年に『実物教授 指導の手引書』(以下『手引書』)も刊行されたのである。

ウイルソンの教科書執筆は建築物図面の描き方(1837)に始まる。『ウイルソン・リーダー』は1860年

代版、1870年代版（ハーバー社版）、1880年代版（Lippincott社版）のシリーズ本である。が、ウイルソンは同読本シリーズ以外にも、聖書物語や学校・カレッジ用歴史教科書も多数執筆した。逝去前年の1904年（91歳）には教育掛図の装置の特許も得るほど仕事に精進した。こうして、ウイルソンは19世紀後半のアメリカで、教科書執筆者として名声を得る。1860年代からニュージャージー州 Vineland に住み、晩年は次女 Fannie 一家と共に暮らし天寿を全うした¹⁰⁾。

(3) ペスタロッチー主義教育とのふれあい

ウイルソンが1831年から2年間学んだ Canandaigua Academy について、村山英雄は、1831年に「教授原理としてペスタロッチ教授法をその教育課程に採用した事実」から「ペスタロッチ原理を組み込んだ最初のニュー・ヨーク州における教員養成機関であったに違いない」と言う¹¹⁾。また、前出の Fisher と Sapiro は、「キャンナダイグア・アカデミーの校長として、ウイルソンは、最もペスタロッチーの影響を受けた同時代の教育理論に精通していたことであろう」と言う¹²⁾。

19世紀のアメリカ教育界は次第にペスタロッチー主義教育思潮が隆盛となる。ニューヨーク州の学校教師対象に刊行された教育新聞 *DISTRICT SCHOOL JOURNAL* (1841-1852) には Horace Mann (1796-1859) らによるペスタロッチー主義教育、実物教授についての論文が連載されている。初代合衆国教育局長官を勤めた Henry Barnard (1811-1900) らの教育行政者の注目も集めた。これは、それまでの暗誦やレシテーション指導を専らとした学校教育に問答を取り入れた画期的な指導法改革が行われたことを意味する。それだけでなく子どもの生活経験を第一義とする教育目的、内容にも関わる重要な転換軸であった。ウイルソンはアメリカで受容され展開するペスタロッチー主義教育をアカデミーの学生や教育者として、1830年代

から1850年代にかけて何らかの形で経験していたのである。したがって、1860年刊行に向けて『ウイルソン・リーダー』を執筆した時期は、ウイルソンにとり、ペスタロッチー主義教育に関する知識と経験の豊富な時期であったとすることができよう。

明治初期のわが国でペスタロッチー主義教育者として有名なのは E. A. Sheldon (1832-97) である。村山によれば「アメリカ師範学校教育の近代化にあたりペスタロッチー原理に基づく実物教授法を、教員養成に明確に提示し、実践し」オスウィーゴ方式として各地に定着させた、オスウィーゴ師範学校校長がシェルドンであった¹³⁾。1877年には政府派遣留学生高嶺秀夫が同校を卒業。唐澤富太郎も高嶺が渡米した1875年当時のオスウィーゴを「アメリカで最も教育方法の進んだ地区」であり、同師範学校では「ペスタロッチー主義に基づく人間開発教育が盛んに行われていた」と記す¹⁴⁾。が、ウイルソンはシェルドンよりも以前にペスタロッチー主義教育の受容と推進に関する先駆者であり、『ウイルソン・リーダー』で具体的内容を、『手引書』で基本的指導観を提案した¹⁵⁾。このことから、わが国の近代国語教育の構築はアメリカのペスタロッチー主義教育の移入に始まり普及を試みた過程であると言えるのではないだろうか。

3. 『ウイルソン・リーダー』の革新的要素

『ウイルソン・リーダー』の革新的要素を明らかにするために、ここで、『ウイルソン・リーダー』第1読本と『マクガフィー・リーダー』第1読本の初版本の構成・教材内容の特徴の概要を比較考察しよう。まず、それぞれの第1読本の目次を作成し、教材内容の特徴を記した比較対照表を表1として次に掲げる。

表1. 『ウイルソン・リーダー』第1読本と『マクガフィー・リーダー』第1読本の構成・テキスト比較

『ウイルソン・リーダー』第1読本 (1860)	『マクガフィー・リーダー』第1読本 (1836)
教師への指示 第1部 (AからZまでの26課業) (・動植物や日常生活で用いる道具の挿絵) (・各課は4文構成) 書くことの学習 (レッスン、A～Zで始まる文) 教師への指示 綴り字学習	
第2部 4文字以下のやさしい言葉	
1 課 新しい本と母娘	3
2 課 川遊びをする少年たち	8
3 課 凧揚げをする少年たち	2
	1 課 <u>新しい本</u>
	2 課* 少年、小鳥、犬 ◎ 1
	3 課* 登校する少年、馬、牛、雌鳥 ◎ 1

4 課	少年たちと新しい帽子	3	4 課*	野生の牛	
5 課	ベッドの上の猫を見て	4	5 課*	猫と犬	1
6 課	湖でボートに乗る男	○ 3	6 課*	少年と犬	
7 課	野球をする少年たち	4	7 課*	熊	◎ 1
8 課	朝ベッドで起こされる子ども	◎ 3	8 課	起床の時刻	1
9 課	薔薇の茂みの傍らの大人と子ども	4	9 課*	貧しい老人	[修身] 1
10 課	庭で小鳥に餌をやる少年少女と巣	2	10 課*	朝日が昇るとき	◇ 1
11 課	雌鳥に餌をやるアンと小鳥	6	11 課*	遊ぶ少年	○ 2
12 課	籠の小鳥を見ているジェーン	3	12 課*	ロバートと馬	
13 課	庭の木の枝に止まる逃げた小鳥	○◎ 8	13 課	散歩	1
14 課	犬の親子の団らんと悪い少年	3	14 課*	足の不自由な男	1
綴り字学習 (レッスン) フォニックス			15 課*	小さなヘンリー	1
第3部 5文字以下のやさしい言葉			16 課	よい少女	3
1 課	森の中の子ども	3	17 課	ジェームス・スミスについて	
2 課	老人	11	18 課*	こんもりとした茂み	
3 課	ラッパ吹き	◇ 10	19 課*	足の不自由な犬	
	4人の男	2	20 課	ジョン・ジョーンズ	
4 課	別の老人	10	21 課	お月様	
5 課	アンから逃げた小鳥	◎ 6	22 課	学校に行く少女	
6 課	大小の帆船	◎ 3	23 課*	親切な少年	
7 課	アンと人形	◎ 6	24 課*	新しい石盤	
8 課	男児を抱く女性	4	25 課*	動物が話すこと	
9 課	五感とそれぞれの器官,	[説明] 1	26 課*	乱暴者の少年	
10 課	手, 腕, 足, 靴	◎ 5	27 課	教の教え方	2
11 課	ジョン, ジェイムズの勉強,	[説明]	28 課	野生のけものたち	
12 課	飛ぶ昆虫, 虫, 蜜蜂, 鼻,	[説明] 6	29 課*	お話の語り手	
13 課	玩具屋でジェーンとおばさん	4	30 課*	雪の日の犬と少年	
14 課	丘を馬で駆け抜ける男	○ 7	31 課	良い助言	
15 課	出かける主人と使用人の傍の少年	1	32 課	小さなルーシー	2
16 課	草刈仕事をする男と馬, 牛, 干草作り [説明]	4	33 課	ピーター・ホルト	
第4部 6文字の言葉, 2つまたは3つのシラブルからなるやさしい言葉			34 課	ポスト氏について	1
1 課	少年と百合	2	35 課*	ポスト氏と少女たち	[導入]
2 課	白鳥	[説明] 1	36 課	子どもたちと小さな山羊	
3 課	動物の鳴き声	[説明] 1	37 課*	夕べのお祈り	
4 課	学校での勉強	◎ 5	38 課	嘘をついた少年	
5 課	冬	◎ 4	39 課	嘘をついた少年のその後	○ 1
6 課	少年と卵	[説明] 1	40 課	小さな煙突掃除人	4
7 課	豚と少年と犬	◎ 3	41 課	小さな煙突掃除人の続き	1
8 課	花摘み	[説明] 6	42 課	強いお酒を飲んではいけません	
9 課	家鼠	[物語的説明]	43 課	ウイスキー飲みの少年	[修身] 1
10 課	馬ぞり	○ 3	44 課	決して悪さをしてはいけません	
11 課	箱から聞こえる声	○◇ 12	45 課	小鳥の巣	[導入] 1
	綴りの勧め(鼠, 猫, 鼻) 子どもと老人			お別れの言葉	
12 課	子どもと老人				
13 課	大きな樫の木				
14 課	子どもの朝のお祈り	<詩>			
15 課	湖で魚獲りをする3人の男の様子	3			
16 課	庭	◎○ 21			

19世紀アメリカにおける『ウイルソン・リーダー』の革新的要素と位置づけ
 —『マクガフィー・リーダー』との比較を中心に—

17 課	第16課の庭で子どもに語るペン	○	1
18 課	神への感謝		<詩>
19 課	子羊が羊となり羊毛が衣装になる話	[説明]	◎
20 課	果物籠に一杯の果物と太陽の影		◎
21 課	災難で死んだ犬の教訓話		
22 課	朝	○	3
23 課	真昼		3
24 課	夕べ		4
25 課	鷺		
26 課	野生の山羊		
27 課	子どもの夜のお祈り		<詩>
28 課	神への感謝		<詩>
29 課	ライオン		
30 課	幼子へのイエス様の祝福		
31 課	寓話		2
32 課	ささやかなこと		<詩>
第 5 部			
1 課	数えること		◎
2 課	*ジョンとメリーと私が加算する+計算		3
3 課	* ジェーン, ピーター等が減算4回+計算		4
4 課	* 足し算練習 7 問		
5 課	* 掛け算練習 17 問		
6 課	神は全てのものをつくり給う		<詩>
	子どもの夕べのお祈り		<詩>
7 課	* 読みの学習		<詩>
8 課	* 田舎で聞こえる音		(頭・脚韻, 繰り返し)
9 課	ユダヤ人の祭司		
10 課	ラクダ		[説明]
11 課	種蒔と収穫		
12 課	神は永遠の善なり		詩(頭・脚韻, 繰り返し)
13 課	衣服の素材と身なりの美しさ		[提案]
14 課	お金		◎
	アメリカの貨幣 (銅貨, 銀貨, 金貨)		
掛け算 一覧表 (2×1~12×12)			

本表作成に際しては、以下の諸点に留意した。

- ①課業名に下線を引いた箇所は、それぞれの読本においてタイトル名が記されている課業を示す。課業名が記載されていないばあいについては原本表記にならない内容を考慮して筆者が便宜的に記した。また、それぞれの表右側の数字は本文中の疑問文の数を示す。
- ②『ウイルソン・リーダー』本文の問答文の中で、問いに対する答に相当する文が本文中に用意されていないものに注目した。挿絵を観察して導かれる問答学習が描かれている内容の読み取りから発展して学習者の実際の経験を問う文が掲げられているばあいに◎印、想像性を問う文が掲げられているばあいに◇印

○印、知識を問う文が認められるばあいに◇印を記した。

③『ウイルソン・リーダー』の「説明」とは本文が科学的説明文に相当するものを意味する。

④『マクガフィー・リーダー』本文の疑問文は、物語世界の登場人物相互の会話文以外で読み手である学習者に問いかけたものに注目した。『ウイルソン・リーダー』の分類と同様に、◎◇印は知識を問うものである。

⑤『マクガフィー・リーダー』の「導入」とは本文の物語世界に学習者を引き込むための動機づけとなる問いかけを意味する。また、「修身」は本文の内容について学習者自身の人格陶冶を目的とした問いかけを示す。

⑥挿絵に関しては『ウイルソン・リーダー』は挿絵のないばあいを、『マクガフィー・リーダー』については挿絵のあるばあいをそれぞれ課業数の右に*印で示した。

なお、表1の数字、○・◎・◇印、課業数横の*印、下線ならびに() [] < >とその表記は筆者によるものである。

続いて、両教科書の違いが象徴的に示されている課業をF1~F4として次に掲げる。F1とF2は共に学習始めの導入部として、学習の動機づけと心構えを示した課業で、F3とF4は共に題材が子どもと小鳥に関する課業である。紙面の都合により頁全体ではなく、教材のみを掲げる。

以下、本節では『ウイルソン・リーダー』を『ウ』、『マクガフィー・リーダー』を『マ』と記す。

(1) 構成面


前掲表1に掲げた構成を比較するとその違いは歴然と示されている。『マ』は始めから第1課の課業が設けられ、第45課の後には教科書執筆マクガフィーによる学習者へのねぎらいと第2読本の学習に対する動機づけとなる励ましの言葉が掲げられている。また、第1課に登場するジョン、アン、ジェーンがその後も登場するなど『マ』は物語教材中心に構成されている。

これに対し、『ウ』は、文字数やシラブル数を言語習得の発達段階の基準としている。この基準に適合する短い教材文を課業で用いる。第1部から第5部へと至る順次性をみても、易から難への言語習得の発達段階が考慮されている。学習者の言語(文字)習得の発達段階を考慮した教材編成が認められる。

また、第1部と第2部の前には「教師への指示」が設けられ、話し言葉指導の留意点が示された。教科書は暗誦する教材集ではなく、問答学習教材であること

F1. 『ウイルソン・リーダー』 第1読本
第2部 1課

LESSON I.




Is it a new book?
Is it a nice new book?
May I read the book?
You may take the book, and read it,
and then you may tell me what is in it.
Take good care of the book. Do not
soil it, nor tear it.

new	nice	read	take	soil
book	may	then	good	tear

(p.11)

F2. 『マクガフィー・リーダー』 第1読本 1課



John must not tear the book.
He may see how fast he can
learn.

John and there learn
Ann has here nice
Jane must keep clean


LESSON I.
The New Book.

Here is John.
There are Ann and Jane.
Ann has a new book.
It is the first book.
Ann must keep it nice and
clean.

(pp.1-2)

F3. 『ウイルソン・リーダー』 第1読本
第2部 12課・13課

LESSON XII.



Do you see Jane?
She has a bird, and
she has put it in a cage.
Do you see her feed the
bird? Is the bird
tame, or wild?
The bird is tame now,
but once it was wild.
The bird is a jay.

LESSON XIII.



Can a bird sing?
Yes; it can sing. Do
you like to hear it
sing? Yes; do not
you like to hear it?
I like to hear it
sing, and I like to see
it, too.
Did the bird hop, or did it fly? It
flew up to the top of the tree, and now it
sits on a limb of the tree.
Can the bird see me now?
It can see you, and it can hear you,
too.
Is that the bird that Jane lost?
Yes; it is the same bird.
Is it glad to get out of the cage?
Will it come back, or will it fly off?

(p.18)

F4. 『マクガフィー・リーダー』 第1読本 45課

LESSON XLV.
The Nest of Young Birds.

Winter is now gone and the
warm season is come. See!
What does that boy have in
his hand? It is a nest of
young birds.

I wonder what he is going
to do with them. I hope he
will not kill them. Poor little
birds! What a wicked boy, to
take them from their parents!

I dare say he will be careful
of them, and put them into a

cage and feed them, but he
can not take as good care of
them, nor feed them as well
as the old birds.

Besides, it seems so cruel
to shut them up in a cage,
and not let them fly about in
the air as other birds do!

Now he has put the nest on
the ground, and has gone to
his work and left them. The
old birds can now come and
feed them. Oh! I am so happy.
I wish they could carry
them back, but they can not.

would	careful	about	warm	going	carry
young	can not	happy	reason	parents	little

(pp.148-150)

が示された。

(2) 教材面

ウイルソンが *MARCIUS WILLSON NOTEBOOK*,
(1865?)¹⁶⁾ に記しているように、『ウ』は同時代の読
本の中でも特に『マ』を強く意識して、これを変革し

ようと試みたのである。

まず、前掲の表1とF1~F4の課業例から『ウ』の
教材内容における革新的要素を抽出してみよう。

①問答文の多用と多様性

F1とF2, F3とF4を比べると、『ウ』には本文中の

疑問文の数が多いことが明らかである。読本全体については前掲表1のそれぞれ右端に数字で示した通りである。『ウ』において本文中に疑問文のある課業は全課業のおよそ71%を占め、これは『マ』の50%を遙かにしのぐ。しかも、1課業中の疑問文数も『マ』が1または2文で、最も多い課業が4文であるのに対し、『ウ』は最も多い課業で21文ある。疑問文を含む課業における疑問文数の平均は、『マ』の1.4文に対し、『ウ』は4.5文である。

また、この疑問文の種類を見ると、『マ』はそのほとんどが本文中の登場人物による会話文であり、この中で、学習者の経験を問うものは3課、学習者の想像力を問うものが2課、知識を問うものが1課である。これに対し、『ウ』はそれぞれ、学習者の経験を問うものが14課、想像力を問うものが8課、知識を問うものが2課に含まれている。

さらに、問いの機能について見ると、『マ』は聞き手である学習者に話者（読本を読み聞かせる教師）が物語の内容について問いかけることで、学習者の注意を喚起して教材（物語）の世界に引き込むことができる。これに対して、『ウ』は聞き手である学習者にとり、挿絵は読本学習の重要な観察対象となる教材である。疑問文と挿絵が共に、教師（教材文）の問いに応じて学習者が考えながら応答するための必要不可欠な役割を担っていることがわかる。

ここで、このような対照的な教材文の特徴から明らかに導き出される学習形態と学習指導目標についても考えておきたい。『マ』のばあいは、学習者である子どもは平叙文の多い読み物教材を専ら聞き、暗誦する学習が主であることを示す。F2, F4に明らかのように、『マ』は教材内容の物語性に富んでおり、そこに描かれたキリスト教的人格陶冶的側面を重視する。教師は子ども的人格陶冶を願う教材文を通して語りかけ、導く。読本はそのために目的的に用いられる。これに対し、『ウ』に見られる問いかけの文の多い教材による学習は、聞くことによる一方通行の学習ではなく「聞く⇔考える⇔話す」という双方向の学習活動が存在することが明示されている。聞き、考え、発言する主体を育成しようとする姿勢が示されている。

②挿絵の活用

表1に示したように、挿絵の描かれた課業の全課業に占める比率について見ると、終わりのお別れの挨拶まで含めると、『マ』のばあいはおよそ52%であるのに対して、『ウ』のばあいは第2部からの課業については全体のおよそ92%を占める。挿絵のない課業は、計算を取り上げた課業と詩的文章であることにより、ほぼ100%に近い挿絵を教材の一部として積極的に有

効利用していることになる。

『マ』とはその用い方も異なる。『ウ』では教材文と深く関連した実物として位置づけられており、積極的に教材文による学習活動と関わりを持つ。教材文に示された問いかけに対し、考え、答えるための手がかりを挿絵の重要な機能として準備している。

③題材の拡大

教材文の題材についても、教師の読み聞かせによる説話的物語性を重視した『マ』に比べると、『ウ』はその範囲が広がりを見せている。これは、革新的要素というよりも、発展的要素とも言えよう。しかしながら、その題材の広がりについては、表1の課業の題名からもわかるように、科学事典の説明とは趣が異なり、昆虫、動物など理科的内容ばかりでなく、手袋・布など身につけるものについての家庭科的内容、労働の様子など社会科的内容、祈祷文、寓話や押韻によるリズムミカルな表現を楽しむなど国語科の領域の拡大も認められる。

(3) 時代の要求に応えた『手引書』の用意

ここで、『手引書』についてふれておこう。同書の「序論」にはウイルソンの構想するペスタロッチー主義教育の観点について、具体例を挙げながら平易な言葉でわかりやすく説かれている¹⁷⁾。まず、現場の教師の共通認識を形成することを第一に考えていることがわかる。ペスタロッチー主義教育思潮の隆盛した当時の教育界にとり、ウイルソン執筆の新しい読本と指導の手引書の刊行はまさに時代の必要性に応えたものであったと言えよう。いかなる教育改革も適切な教科書とそれをを用いる現場の教師の基本的教育観・指導観の共通理解なくして展開することはない。

ここで『手引書』で提案された基本的教育観をウイルソンの言葉を用いつつまとめると次の3点になる。

- ①教育の指導体系は、五感を生かした自然な体系を「順次性」として適用すべきである。
- ②知覚能力のはじめの発達段階は「見ること」・「聞くこと」である。
- ③科学的思考は「実物」教育体系に基づいて構築される発見学習である。

これらの観点がどのように反映されたかと併せて、それ以前の読本の代表例として、最も普及していたとされる『マクガフィー・リーダー』と比較した『ウイルソン・リーダー』の革新的要素を次にまとめておく。

(4) まとめ

前項を見ると、『ウイルソン・リーダー』の革新的要素にはウイルソンの基本的指導観が見事に反映されていることがわかる。『ウイルソン・リーダー』において提案された革新的要素とは、つまり、問答文、挿

絵を読本教材に積極的に位置づけたことに象徴的に示されていると言うことができよう。この意義を次の五つにまとめておこう。

①問答文と挿絵を重要な手がかりとして「聞くこと」⇒「考えること」⇒「話すこと」という学習過程・学習指導法を示した。これは19世紀の暗誦・レシテーション指導には見られない新しい指導法である。音声指導から話し言葉教育へ移行する重要な転換軸が示されていることがわかる。

②問答文と挿絵は、ウイルソンが基本的指導観の中で「最も大切な観点」であるとする「見ることと聞くこと」の感覚を第一」とすることの現れでもある。挿絵を実物として注意深く観察しながら教師による教材文の問いかけを聞く。それに対する答えの文を考える。答えは実際に教材文で確かめられるものばかりではなく、自身の経験、想像力や知識を活用して考えながら発言することが求められている。ここにはまた、「練習することこそが話し言葉の能力を適正に育成できる」という実物教授の基本的指導観が反映している。「考える主体」はすなわち「発言する主体」であるとする、現代の話し言葉教育にも通じるアメリカの伝統的な基本的教育観がここに示されている。

③問いかけに対する答えを求めて挿絵を観察し考えるという学習過程には、まず疑問をもち、次に対照を観察するという発見学習の基礎学習過程と見ることができる。科学的思考力を育てる基礎力の育成をまず、初級読本である、第1読本でこのようにして育成しようとしたことがわかる。

④科学的思考は「実物」教授体系に基づく「発見学習」で育成される、というウイルソンの提唱は、科学的認識力を育成することの大切さが読本指導を含めた学校教育全体において認知されることにつながる。

⑤教材範囲とジャンルの拡大の方向性には、学習者の日常生活におけるさまざまな経験を学習題材に組み込もうとする実物教授の基本的指導観が見られる。ここには教科の論理ではなく学習者の実際の学びの方法に教育者の関心が向けられたことを意味する。

これらの基本的指導方法が、指導観と共に『ウイルソン・リーダー』や『手引書』を通してそのままわが国に移入されていたならば、初版本『マクガフィー・リーダー』と一脈通じるものがある、漢籍を学習の中心教材とした、素読、書写に始まるわが国の読本教育内容と方法を大きく転換させる基軸となるはずのものであったのではないだろうか。この点については、今後さらに慎重に検討を重ねたい。

4. 『ウイルソン・リーダー』の位置づけ

Rudolph R. Reeder はコロンビア大学学位論文(1900)において、アメリカ教科書史の中で19世紀後半の最も有名な教科書は『マクガフィー・リーダー』であるとの認識を示しながら、『ウイルソン・リーダー』は「教科書の改良に貢献した」と評価し「総合教科書の先駆となった」との認識を示している¹⁸⁾。

ウイルソンの提唱した新しい指導観は教室で聞くことによる暗誦、レシテーションによる受動的音声学習を聞くこと、考えること、話すことを連関させる活動的学習に解放した。それと共に、ウイルソンの構想する基本的指導観は『ウイルソン・リーダー』における学習者の位置づけ、指導目標、学習題材、学習過程、学習活動などさまざまな展開の可能性を示唆するものであった。ここに19世紀末葉から米国で展開する進歩主義教育 (progressive education) の淵源をうかがうことができる。この基本的指導観を具体化した『ウイルソン・リーダー』はそれ以前の読本教科書に比べると構成、教材内容共に新しい提案を示したと言うことができよう。

19世紀のアメリカは、学校教育制度が次第に整えられた世紀であると同時に、ペスタロッチー主義教育が研究開発された世紀でもある¹⁹⁾。コモン・スクール教育を普及させようとしたマン (Mann, Horace) らの努力もあり、ペスタロッチー主義教育が学校教育現場に知られることになる。次第に創設された師範学校でも盛んに研究開発が進められた。師範学校教育を学ぶために1875 (明治8) 年に文部省が派遣した神津専三郎、高嶺秀夫、伊澤修二らの留学先であるアルバニー、オスウィーゴ、ブリッジウォーターの各師範学校は当時のアメリカの熱心なペスタロッチー主義教育の研究開発拠点校であった。わが国においては、ペスタロッチー主義開発教育は高嶺秀夫の帰国後に東京師範学校とその卒業生を中心に研究され、実践が行われたとされる。しかしながら、『小學讀本』のモデル読本となる『ウイルソン・リーダー』を移入した当初からペスタロッチー主義的教育は、明治期近代国語教育の創始期において既に導入と展開がはかられていたと考えられるのではないだろうか。

おわりに

以上、『マクガフィー・リーダー』と『ウイルソン・リーダー』の初版本第1読本の比較を通して19世紀アメリカにおける『ウイルソン・リーダー』の革新的要素について考察した。『ウイルソン・リーダー』登場

以前の代表的な読本である、初版本『マクガフィー・リーダー』を発展させた明らかに異なる要素として次の3点が掲げられる。①子どもの言語（文字）習得の発達段階に基づいた教材提示の順次性が認められる。②教材文は問答式の疑問文と応答文、説明する平叙文で構成されている。教材文の展開には学習者への問いかけに対して間接的実物教材としての挿絵を重要な手がかりとして観察し、考え、答えを導くという学習活動が組み込まれている。③教材のジャンルや範囲も広がりを見せ、学習者の生活経験をさらに広げるように意図されている。

また、『手引書』においてウイルソンが構想した、バスタロッター主義的教育の重要な観点が具体的に教科書の構成、教材内容、学習過程に反映されていることも明らかになった。特に、教材文の展開に見られる学習過程には、ウイルソンの言う自然な「発見学習」が学習指導に取り入れられており、「科学的思考力」の育成につながる基礎学力を培う学習の場としての要素が認められる。また、ウイルソンの提案した間接的実物教材である、挿絵を教育活動に積極的に位置づけて話し言葉との相互関連をはかる指導方法や、子どもを聞き・話し・考える主体として育成するという観点は、以降アメリカの読本教科書に引き継がれ、学校教育における伝統的指導観の一部を形成していると言える。

本稿の考察を通して、『ウイルソン・リーダー』はウイルソンが構想した実物教授を推進する実験的読本教科書であるだけでなく、その後のアメリカにおける教科書の新たな発展に少なからぬ影響を及ぼしたことも明らかにした。

本稿では『ウイルソン・リーダー』の第1読本を取り上げその特徴を考察した。が、さらに、内容の比較考察を行うことによりわが国の『ウイルソン・リーダー』受容の方向性を検証したい。また、『ウイルソン・リーダー』の第2、第3読本についても取り上げ、『小學讀本』の成り立ちと史的意義を考えたい。特に初級読本教育と中級読本教育の発展性についても考察しなければならない。読本学習の前段階の掛図、入門期読本である『プリマー』²⁰⁾との関連についても考証を重ね、明治初期国語教育構築の全体像のなかで『小學讀本』の位置づけを検討することをさらなる課題とした。

【注】

- 1) 田中義廉編輯 那珂通高校正『小學讀本』巻一～巻四、明治七年八月改正、師範學校編纂文部省刊

2) 望月久貴、『明治初期国語教育の研究』、溪水社、2007.2.10. 583p. 山口隆夫も『『ウイルソンリーダー』と『小学読本』』（『言語文化論集第IX巻 第2号、名古屋大学総合言語センター、1985.3.30.）など『小学読本』と『ウイルソンリーダー』の「言語文化的比較」研究を行っているが、国語教育史研究としての本格的な研究は望月氏による。また、両氏共に研究対象は初版本『小學讀本』（1873）である。

3) WILLSON, MARCIUS, *Harper's Series. THE FIRST READER OF THE SCHOOL AND FAMILY SERIES. HARPER & BROTHERS, 1860, 85p.*

4) WALLAGE, KARL R., ed., *HISTORY OF SPEECH EDUCATION IN AMERICA - BACKGROUND STUDIES*, Speech Association of America, APPLETON-CENTURY-CROFTS, 1954, p.293

5) MCGUFFEY, WILLIAM HOLMES, *THE ECLECTIC FIRST READER FOR YOUNG CHILDREN. CONSISTING OF PROGRESSIVE LESSONS IN READING AND SPELLING MOSTLY IN EASY WORDS OF ONE AND TWO SYLLABLES*, CINCINNATI: TRUMAN AND SMITH, 1836., MOTT MEDIA, 1982. 本稿ではMOTT MEDIA社により1982年に刊行された1836年版オリジナル読本の複製版を用いた。153p.

6) WILLSON, MARCIUS, *A MANUAL OF INFORMATION AND SUGGESTIONS FOR OBJECT LESSONS, IN A COURSE OF ELEMENTARY INSTRUCTION. ADAPTED TO THE USE OF THE SCHOOL AND FAMILY CHARTS, AND OTHER AIDS IN TEACHING.*, 1873. 336p., 本書は実物教授の入門の手引書（13×20.5cm）である。初版は『ウイルソン・リーダー』初版本（1860-61）刊行後の1862年。ウイルソンはこの手引書で提示した指導体系や指導方法を念頭において同リーダーを執筆したことがわかる。本書は1873（明治6）年刊第4版で、兵庫県尋常師範学校蔵書印のもとに「第1号所蔵本」と記されている。神戸大学人間科学系図書室所蔵本。

7) ウイルソンについて、望月久貴は『明治初期国語教育の研究』（2007）で「当時、Marcius Willsonは言語・歴史等の教授法の大家」（p.73）と述べているが、これはウイルソン著『プリマー』（1860）の表紙に記された著者紹介文から「歴史学者であったらしいが、本書やすでに引用したSpelling bookやchart（Calkinsと共著）からも推測されるように言語学者でもあった」（p.177）という推測に基づいたものであり、山口隆夫も「マーシアス・ウイルソ

- ン (Marcius Willson) の伝記については殆ど知りようがない) (『言語文化論集第Ⅸ巻第2号, 名古屋大学総合言語センター, 1985.3.30, p.237) と述べる。このようにウイルソンの経歴についてわが国ではこれまで明らかではなかった。
- 8) 1788 *HISTORY OF ONTARIO CO., NEW YORK, With Illustrations DESCRIPTIVE OF ITS SCENERY, Parational Residences, Public Buildings, Fine Borks, and Important Manufactories, FROM ORIGINAL SKECHES BY ARTISTS OF THE HIGHEST ABILITY.* EVERTS, ENSIGN & EVERTS, 1876, p.236
- 9) Peter J. L. Fisher and Sheila Shapiro, *MARCIUS WILLSON (1813-1905) and the School and Family Readers, History of Reading News.* Vol. XX No. 1, 1996: Fall., http://www.historyliteracy.org/search_display.php? Article_ID=96, 2004.11.26, 2007.5.30
- 10) ウイルソンの経歴については, Ibid 8), 9) と共に *United Sates Federal Census* を参照した。資料入手については, Canandaigua City School Director, Andrew Thomas 氏, Ontario County Historical Society & Museum, Curator, Willma Townsend 氏に尽力いただいた。なお, ウイルソンの出生年については, *United Sates Federal Census* には「1814年頃」, Ibid 8) には「1814年の始め」と記されているが, Ibid 9) で Peter J. L. Fisher and Sheila Shapiro は「1813年12月8日」と明記する。本稿はこれにしたがった。
- 11) 村山英雄, 『オスウィーゴ運動の研究』, 風間書房, 1978.3.15, p.78
- 12) Ibid 9)
- 13) Ibid 11), p.214
- 14) 唐澤富太郎, 『教育稀観書 (一) 解説』, 雄松堂書店, 1980.8.15, p.16
- 15) シェルドン第1読本の刊行は『ウイルソン・リーダー』に遅れること12年後の1872年である。SHELDON, E. A., *THE FIRST READER: ADAPTED TO THE PHONETIC, WORD, AND ALPHABET MODES OF TEACHING TO READ.* SCRIBNER, ARMSTRONG, AND COMPANY, 1872, 80p.
- 筑波大学附属図書館蔵本。
- 16) WILLSON, MARCIUS, *MARCIUS WILLSON NOTEBOOK, 1865?* THE MILBANK MEMORIAL LIBRARY COLLECTIONS, コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ GOTTESMAN LIBRARY 所蔵本。332p. 15×32.5×2.2cm
- 17) Ibid 6), 『手引書』の構成は大きく二部に分かれ, 前半の「序論」(pp.3-22) では「実物教育体系が基盤とする基本的指導観」について15項目掲げられている。後半の「本論」では N. A. Calkins と共著の22枚からなる *School and Family series Charts* (以下『掛図』) のそれぞれを1課として「基本的指導方針の提案, 習熟の法則」を共通項目に立てて述べられている。この中で, 国語教育に相当するものは, 第1掛図から第9掛図までである。第10掛図以降は「図画」「線と測定」「色彩」「動物」「植物」に関することなどで構成されている。この『掛図』は『小學入門』甲号(1874)のモデルとなったものである。稿を改めて考察したい。
- 18) REEDER, RUDOLPH R., *THE HISTORICAL DEVELOPMENT OF SCHOOL READERS AND OF METHOD IN TEACHING READING,* THE MACMILLAN, 1900. 5, pp.54-57. 管見によれば『ウイルソン・リーダー』を評価した同書の内容を初めて記したのはドウトカ・マウゴジャータ著, 「明治初期の教科書—田中義廉『小学読本』と Willson Reader—」(『大阪大学日本学報』15, 大阪大学文学部日本学研究室, 1996.3, pp.171-197) である。なお, 『ウイルソン・リーダー』刊行当時の1860年代における学校教育関係者による同読本の評価については, 第111回全国大学国語教育学会宮崎大会(2006)の自由研究発表で報告した。
- 19) 19世紀を中心としたアメリカの教育環境の発達と国語科については, 拙著『アメリカの話し言葉教育』(溪水社, 2005, 11.23, pp.190-197) にまとめている。
- 20) WILLSON, MARCIUS, *Harper's School and Family Series. THE SCHOOL AND FAMILY PRIMER: INTRODUCTORY TO THE SERIES OF SCHOOL AND FAMILY READERS.* NEW YORK: HARPER & BROTHERS, 1860, 49p.